

## 枚方公済病院を受診された患者さまへ

当院では下記の臨床研究を実施しております。  
 本研究の対象者に該当する可能性のある方で診療情報等を研究目的に利用または提供されることを希望されない場合は、下記の問い合わせ先までご連絡ください。

研究課題名 (承認番号)	大腸がん周術期におけるリハビリテーション栄養の効果について
当院の研究責任者 (所属)	田中 満(外科 病院長補佐)
他の研究機関および 各施設の研究責任者	龍谷大学 宮本賢一 教授
本研究の目的	「大腸がん周術期におけるリハビリテーション栄養の効果について」  がん治療における手術療法は現在でも重要な治療法の1つである。周術期には手術侵襲に伴う代謝亢進のため必要栄養量が増加し、適正な栄養管理を実施しなければ栄養状態の悪化をきたし、退院後の日常生活動作(ADL)に影響する。更に、がん患者はがんの進行もしくは治療過程で様々な機能障害が生じ、そのためにADLが低下するためがんリハビリテーション(以下 ガンリハ)が行われるようになった。近年、リハと栄養管理の併用(以下、リハ栄養)が患者のQOLを高め、予後を改善させることが報告されている。本研修では周術期の大腸がん患者を対象として、管理栄養士の介入による、リハ栄養の有効性を検討する。
調査データ該当期間	自 2020年4月1日～至 2025年1月31日
研究方法 (使用する試料等)	75歳以上の大腸がん患者で腹腔鏡下手術をおこなうリハビリ介入がある患者とした。群分けは従来のクリティカルパス(絶食時に非アミノ酸含有輸液の使用)を用いた、クリティカルパスに沿って標準的な栄養管理を行うA群と、カスタマイズをおこなったクリティカルパス(絶食時にアミノ酸含有輸液の使用)の使用に加え、管理栄養士が栄養介入をおこなうB群とする。2群において以下の項目について比較し、リハ栄養の有効性を検討する。①栄養充足率(エネルギー、たんぱく質量)、身体機能(握力、歩行速度)、体組成。
試料/情報の他の研究機関 への提供および提供方法	無し
個人情報の取り扱い	匿名化
本研究の資金源 (利益相反)	無し
お問い合わせ先	枚方公済病院 栄養科 奥和晃
備考	